

今回はほんとに面白い話です。坂井節々く裂！って感じですね。こちらの思い込みで子ども達にツライ思いをさせてしまっている事もあるでしょうね。「あの、坂井先生でも失敗するんや？！」と思うと力が湧いてきますね。ただ、坂井先生が凄いの、その失敗に気付くことだと思います。今回の話なんかだと、気付かない人は気付きませんよ？「あの子はわがまま言って、最後にはおもしろいわ！最悪！」とか・・・切ない(；；)自分の失敗に気付くこと、考えること、謝る事、そして繰り返さないこと。これが実は簡単そうで難しい。そう思います。久田

第27回『わかるように伝えていきますか』

香川大学 坂井 聡

☆失敗は誰にでもある

今回、伝えておきたいことは、失敗は誰にでもあるということです。失敗したときに、子どもに「ごめん」と謝ることができるのであれば、失敗をしてもよいということです。

十数年以上前のことであるが、特別支援学校で勤務していたとき、私も自分の都合で、子どもにいやな思いをさせてしまったことがあります。一年生に入学してきた自閉症のあるAくんが、何とか授業に参加できればよいと考えていたころです。

何人かの先生方が授業の見学に来たときのこと、Aくんには授業にしっかりと出てもらわなくてはならないと考えていた私は、Aくんが十分に満足すれば、授業に落ち着いて参加できるに違いないと考えました。そこで、Aくんの大好きなトランポリンを一時間目に跳んでもらうことにしたのです。

授業は構造化されているし、その上Aくんは、大好きなトランポリンを跳んでから授業に臨むのです。バッチリに違いありません。Aくんは、大粒の汗をかきながら、大きな声で笑いながら大好きなトランポリンを跳んでいました。

さて、いよいよ授業開始が始まります。教室の後ろには参観者が集まっていました。

ところが、Aくん、授業が始まると同時に、にこにこ笑い、手をたたき、飛び跳ねながら教室の後ろの戸を開けて出て行こうとするのです。さすがの私も「しまった」と思いました。

こともあろうにこんなときにトランポリンをしてしまったのだろうと考えたからです。

私はAくんの手を取り、顔は笑いながら「Aくん、トランポリン楽しかったね」と言って席に戻そうとしました。もちろん、心の中は穏やかではありません。「今日はお客さんも来ているのに」と、Aくんには悪いのですが、手は少し強く握り気味です。席に着いたAくんでしたが、また立ち上がり、飛び跳ねながら後ろの戸から出ていこうとするのです。「だめって、授業ちゃんとしなかったら、トランポリンはできませんよ」と心の中で言いながら、「じゃあ三時間目にトランポリンしようかな」と顔では笑い、さっきと同じように手は少し強く握り気味で席に戻そうとしたときです。

何と、Aくんがおしっこをしてしまったのです。授業はもちろん目茶苦茶になってしまいました。

このような結果を到底受け入れることはできません。職員室でいろいろ考えていた時のことです。

「ちょっと待てよ」と思ったのです。「ひょっとしたら、Aくんは、トイレに行きたいことを訴えていたのではないか、ニコニコ笑い飛び跳ねながらであるが・・・。」

この失敗は、話ができない子どもに対して、教師が子どもの言いたいことを勝手に都合よく解釈しその結果、子どもにつらい思いをさせてしまうことがあるということに気がつくきっかけとなりました。このような失敗は、誰でも経験することだと思います。もちろん、同じような失敗を繰り返さないようにしなければならないのですが、この事件は、Aくんにとっても私にとっても楽しい経験ではなかったのですが、子どもに合わせることの限界と、子どもの方からのわかりやすい発信も必要だということに気付くことができたという点においては、私にはとても貴重な体験でした。

しかし、Aくんにはとてもいやな思いをさせてしまったと反省もしているのです。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里） クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会） 自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンバワメント研究所）など